

---

# 仮面ライダーディケイド～新たなる旅

辰巳 翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜新たなる旅

### 【Nコード】

N6718M

### 【作者名】

辰巳 翔

### 【あらすじ】

旅を終えて、ユウスケと夏美が自分の世界に戻ったあとも、土は一人で旅をしていた。そんなある日、土は灰色のオーロラに包まれ、紅渡と出会った場所に来ていた。そして、新たな仲間、もう一人のディケイドの「ヒオリ」を加え、新たな旅が始まる・・・この小説は、ライダーの世界だけでなく、アニメやゲームの世界にも行ってもらおうと思います。コラボはお気軽にどうぞ！

## 第1話 旅の始まり・新たな仲間（前書き）

作「ふふふふふ．．．あははは！」

士「壊れてる．．．」

夏美「ですね．．．」

ヒオリ「何ででしょう?」

作「なんでかって?今でさえ一つ小説書いてるのに、また書き始めたからさ!」

全員「自分で書き始めたのに!？」

作「そう、自分で書き始めたのに」

士「何なんだ、この自信たつぷりに答える作者は．．．化け物か!」

作「あ、化け物じゃないよ。こういう性格なの!」

夏美「どういう性格ですか．．．」

ヒオリ「本当ですよ．．．とにかく、第1話 旅の始まり・新たな仲間、始まるよ!」

## 第1話 旅の始まり・新たな仲間

士「ここは？確か夏美を探してたはず・・・」

そこは士の見慣れた場所だった。そして、この空間にはあいつが居るはずだ士はそう思った。

士「ん？あいつは・・・人助けか？て、あぶねえ！」

士はとつさに走り出し、倒れかけた少女を支えた

士「まさか、お前がこんな事もするなんてな」

？「誰かと思ったら、デイケイド・・・いや、士さんですか」

士「だから何だ。こいつらは？何故こんな所に居るんだ？」

士は少女を下にそつとおきながら訪ねた

そこにいたのは、-----紅渡

渡「実は、この二人の居た世界は滅びてしまったんです」

士「・・・俺のせいでは「ないです」そうか・・・」

渡「多分、シヨッカーの仕業です」

士「あいつ・・・まだやってんのか・・・こりないやつめ」

渡「それより士さん、皆さんは？」

士「あれから会ってない。ユウスケも自分の世界に戻ったし、夏美もだからな。夏美にさえどうやって会うか分からないしな」

渡「簡単なことです。夏美さん、来て下さい」

次の瞬間、灰色のオーロラが現れ、中から一人の女性が出てきた

夏美「ここ何処ですか？……つて、つ、士君！？」

士「夏美！」

渡「夏美さん、これから士さんも一緒に旅をするので」

夏美「また一緒に旅出来るんですね！よろしくお願いします！」

士「ああ……！」

渡「バックルとカードはありますか？」

士「当たり前だ」

士は「デイケイドライバー」と「ライドブッカー」を出す

すると、ライドブッカーからカードが何枚か飛び出てきた

士「これは？」

渡「新たなカードです」

士「新たなカードか・・・」

渡「そうだ、士さん達に頼みたいことが・・・」

士「なんだ？」

渡「この子を、一緒に旅に連れて行ってくれませんか？」

渡の後ろから出てきたのは・・・小学3年生くらいの男の子だった

夏美「どうしたんですか？その子」

渡「この子の世界も、滅びてしまったんです」

夏美「え！？」

？「・・・渡さん」

渡「なんですか？ヒオリ君」

ヒオリ「あの人も俺と同じ・・・ディケイドなのか・・・？」

士「『俺と同じ』って事は・・・」

夏美「士君と同じディケイド・・・ですか？」

渡「はい。この子の世界は、未だにどこかわかりません」

士「分からないって、どういう事だ？」

渡「ここに来たとき、記憶がなかったんです」

士「記憶が・・・」

夏美「なかった・・・？」

渡「ええ。ですが、名前は何故か覚えていました」

士「名前は覚えてたのか」

渡「なので、士さんと夏美さんに、この子を預かって欲しいのです」

士「・・・は？」

夏美「渡さんの頼みたい事って・・・」

士「これか？」

渡「はい」

夏美「あの子達は・・・？」

渡「あの子達・・・？あ、あの子達は、大丈夫です。僕が何とかするのです」

夏美「分かりました」

士「で、どうする？夏ミカン」

夏美「夏美です！……でも、世界が分からないなら、連れて行っ  
た方がいいのでは……？」

士「でもなあ……よし、じゃあ連れて行くか」（後ろ  
で親指構えられたら断ることできねえだろうが！）

夏美「これからよろしくお願いしますね。ヒオリ君」

ヒオリ「はい、よろしくお願いします。えっと……」

士「俺は門矢 士。んでこっちが夏ミカンだ」

夏美「士君！光家秘伝、笑いのツボ！」

士「はーははははっは！いい加減ははははやめる！ははははは  
！夏ミカン！皮むくぞ！あはははは！」

ヒオリ「……………」

この瞬間、ヒオリは（この人には逆らわない方が身のためかな……  
？）とか思っていたとか

夏美「あ、私は夏ミカンじゃなくて、光 夏美です」

ヒオリ「よろしくお願いします。士さん、夏美さん」

士「あ、ああ……よろしくな」

渡「それでは、よろしくお願いします」



こうして、士、夏ミカ・・・スイマセン。親指しまつて下さい。それでは改めて、士、夏美、ヒオリは灰色のオーロラに包まれた

### 写真館

士「久しぶりだな」

ヒオリ「夏美さんの家って、写真館なんですか？」

夏美「まあ・・・そうですね」

ヒオリ「凄いですねえ・・・。？これって、なんですか？」

そう言ってヒオリは、あの壁に近づく。あの壁とは・・・そう、デイクライドである士を何度も導いてきた背景がある壁だ

夏美「あ、あんまりそれに近づかない方が・・・」

士「って、その鎖はむやみに引つ張るな！」

士が注意したの時は、すでに遅く、ヒオリはもう引つ張っていた

ヒオリ「え・・・？もう引いちゃっ「ガラガラガラ」うわああああ  
!?!」

士「やつちまった・・・」

夏美「でも、どうせもう次の世界に行くんですから」

士「それもそうだな」

ヒオリ「び、びっくりしたあああ・・・」

夏美「大丈夫ですか？・・・土君、この世界は？」

背景には、風車が映っていた

士「この世界は・・・まさか・・・！」

そう言つて士は、外へ飛び出していく

夏美「ちょっと、土君!？」

ヒオリ「待つて下さい!」

士「やっぱり・・・」

夏美「やっぱりって、どういう事ですか？」

士「ここは・・・ダブルの世界だ」

そういつて、士はカードを取り出す。そのカードは、すでに使える  
ファイナルフォームライドWと、まだ使えないカメンライドW、8  
枚のフォームライド、そしてファイナルアタックライドWだった

ヒオリ「あ、俺のライドブッカーからなんか出てきた・・・」

ヒオリのライドブッカーからも、士と同じWのカードが出てきた。  
だが、一枚多いのは気のせいか・・・？

夏美「気持ちいい風ですね」

士「のんきだな、お前は。ショッカーがまた動き出したのに」

夏美「今度は、私も戦えます」

士「どうせ足手まといだろ」

夏美「つか・さ・く・ん？」

士「やめろ！今のは冗談だ冗談！」

夏美「問答無用です！光家秘伝、笑いのツボ！」

士「あはははは！い、一日に、に、二回はやめろ！はははははは！」

ヒオリ「……………あ、そうだ。夏美さん、ダブルって何ですか？」

夏美「えつと……………」

士「ははは……………はあ……………はあ……………と、とにかく、探偵事務所に行くぞ」

そう言つて士はバイクにまたがる

夏美「あ、待って下さい！……………ヒオリ君はどうするんですか？」

士「小学3年だからお前が後ろに乗ったら、抱っこしろ」

夏美「はあ！？いいんですか！？それで！」

士「早くしないとおいでくぞぞ！」

夏美「もう、わかりましたよ！」

そう言つて夏美は士の後ろに乗り、ヒオリを抱っこした。それを確認した士は、バイクを走らせた

ヒオリ「……………楽しい旅になりそうだな……………」

夏美「なんか言いましたか？ヒオリ君」

そう言つ夏美に対して、ヒオリは…………

ヒオリ「いえ、何でもありません」

と、笑顔で答えるのだった

## 第1話 旅の始まり・新たな仲間（後書き）

作「ぼけえー」

ヒオリ「作者ほつといて俺たちだけでやりましょう」

士「だな。・・・新たな仲間は、お前だよな。ヒオリ」

ヒオリ「はい。何故か名前だけ覚えていて、他は覚えてないんですよ〜」

作「ひーえーほー」

全員「・・・・・・・・」

作「にゃーにゅーによーしゃー!」

デイケイド「もうすんだか?」

キバーラR「いいですよね?答えは・・・」

デイケイド・キバーラR「聞いてない! / ません!」

作「なぜ!?!なぜおこってらっしやるのおおおお!」

ヒオリ「人が喋ってる時に変なこと言ってるからだ」

作「こうなったら・・・やけくそだああああ! 変身!」

ディケイド「あ、ミラーワールドに逃げやがった！」

キバーラR 「これじゃあ、私が出来ません！」

D 龍騎「大丈夫だ、お前の分までやってくる」

夏美「お願いします」

ヒオリ「……………次回！『D現る！／探偵事務所にゴー！』お楽しみに！」

夏美・ヒオリ「全てを破壊し、全てを繋げ！」

オーデイン（作者）「ぎよあああああ！！！」

ヒオリ「最後に一つ、倒れ書けた少女とは、詳しくはバカ（作者）がかいた短編を見て下さいだそうです……………ちゃんと書け！」

ビリ！ 書いてあった紙を破った

第2話『D現る！／探偵事務所へゴー！』（前書き）

作「やっと終わったーーーーー！」

士「うるさい！」

作「スイマセン。にしても、感想来てないな」

士「当たり前だろ。こんな駄目文読んでくれる奴が居ると思うか？」

作「……………」

意外とDSな士さんdy・ヒオリ

夏美「……………とにかく、始まります！」

## 第2話『D現る！／探偵事務所へゴー！』

探偵事務所に向かっている土達・・・すると夏美がごもつともなことを土に聞いた

夏美「そう言えば土君、探偵事務所は何処にあるかわかるんですか？」

土「何故か知らんがポケットにこんな紙が入ってた」

紙には、『鳴海探偵事務所』と書いてあった

ヒオリ「紙が入ってたってことは、行けて事ですかね？」

土「多分な」

それから走ること数分・・・

夏美「ここですか？」

ヒオリ「紙に書いてある名前と同じなので、間違い無いと思います」

夏美「って、土君待って下さいよ！」

土「誰がいるかー？」

？「だから何でこんな事しなきゃいけないーんだよ！」

？「これは所長命令よ！所長命令！」



？「静かにしてくれたまえ！僕は若菜姫のラジオに集中したいんだ！」

上から順に、『左 翔太郎』『鳴海亜樹子』『フィリップ』だ

士「……………」

夏美「あの……………」

翔太郎「ん？ああ、依頼か？」

士「いや、違う」

ヒオリ「士さん、さっきいつてた『ダブル』って何ですか？」

士「半分子怪「半分子怪人じゃねー！」怪人は言ってるよ」

翔太郎「言おうとしただろ！」

士「どっちでも良いだろ。ダブル」

翔太郎／フィリップ「！？」

亜樹子「なにになに？翔太郎とフィリップ君の知り合い？」

フィリップ「……………もしかして、ディケイドかい？」

士「……」名答「……」

翔太郎「なぜここに？」

士「そんなことはどうだっていいだろ」

フィリップ「とにかく、座って話を聞こう」

翔太郎「じゃあ、照井も呼ぼう」

数分後・・・照井到着

照井「なんだ？用件とは」

翔太郎「ああ、これからこいつらについて話を聞くからお前も呼んだ」

照井「そうか」

士「・・・いいか？」

フィリップ「ああ。まずは自己紹介からしよう」

士「俺は元世界の破壊者、『門矢 士』だ。」

照井「破壊者・・・？」

士「ああ、そこは気にしないでくれ。んでこっちは夏ミカン。俺の連れだ」

夏美「・・・光家秘伝・・・」

士「はっ！」

夏美「笑いのツボ！」

士「あはははは！い、一日に何回やる気だ！ははははは！夏ミカン！あははは！」

翔太郎「あいつ、大丈夫か・・・？」

夏美「気にしないで下さい。あ、私は『光 夏美』です。夏ミカンじゃないですよ」

亜樹子「そのこは？」

ヒオリ「僕は・・・『ヒオリ』です」

フィリップ「名前だけなのかい？」

ヒオリ「え、えつと〜」

士「そいつは俺が預かってるから、義理の弟だ」

フィリップ「てことは、『門矢 ヒオリ』でいいか？」

ヒオリ「え？あ、はい」

翔太郎「ヒオリと夏美もライダーか？」

夏美「どうでしょう・・・？」

ヒオリ「俺は、土さんと同じデイケイドです」

フィリップ「もう1人のデイケイド!? 興味深い! 早速検索を……」

ヒオリ「あの、すみませんけど……多分怪人が何か来ますよ……?」

とその時、

ドオオオオオオン!!!

全員（ヒオリ以外）「!?!」

ヒオリ「やっぱり……!」

土「よし、いっくか!」

夏美「私も連れていってください!」

土「どうせ足手まとい……分かったから親指しまえ! 1日に4回は辛い」

翔太郎「俺達も行くぞ! 照井!」

照井「ああ!」

亜樹子、フィリップ以外は事務所を出て行った

フィリップ「ふむふむ、そう言うことか……」

亜樹子「いいな。夏美ちゃんはライダーになれて」

第2話『D現る！／探偵事務所へゴー！』（後書き）

作「うえああああ！」

士「何故にオンドウル!?」

作「なんとにやく!・・・あ、かんだ」

夏美「そう言えば、ヒオリ君は何で怪人が来るって分かったの?」

ヒオリ「なんか・・・気配?的なもの・・・ですかね?」

作「イエス!その通り!」

ヒオリ「いきなり大声出すんじゃないー!」

ゴツン!

作「はべし!」

夏美「ヒオリ君って、私と土君の時の態度と、作者さんに対しての態度って、全然違いますよね?」

士「確かに」

ヒオリ「土さんと夏美さんは大人だからです。ていうか年上だからです」

作「そしたら俺も年上!」

ヒオリ「だまらっしゃい」

ゲシ

作「ぎよべー！」

士「くく……次回も楽しみにしていてくれ……くくくくく……」

作「笑いたいなら笑えー！ー！！」

士「あはははははは！」

夏美「+笑いのツボ！」

士「あははははははははは！笑いがあはは！とまんなくははは！なるだろつが！あははははははははは！」

### 第3話『Wの世界／ヒオリの使い魔!?』(前書き)

1年近く更新しなくてすいません!これからはもう少し早くできるだけように努力します……。

作

「やっつっつと書き終わったー!」

ヒオリ

「もう2011年だけだな」

士

「もう1年ぐらい更新しなかったよな」

夏海

「いったい何してたんですか」

フィーラー

【楽しみに待っていてくれる方もいるんですよ?……多分】

作

「デバイスにも攻められるって何!？」

フィリップ

「だが、事実だろうか?」

作

「俺に味方が1人もいない……orz」



翔太郎

「……あー、まあ元気出せ、作者」

作

「味方がいたああああ！！翔ちやーん！」

翔太郎

「泣くなっつーの」

作

「やっぱりハーフボイルドだああ……！」

翔太郎

「ハードボイルドだ！」

ヒオリ

「さて、あのお馬鹿2人をほっとして」

士

「第3話、『Wの世界／ヒオリの使い魔！？』」

夏海

「始まります！」

### 第3話 『Wの世界／ヒオリの使い魔!？』

士と夏美、ヒオリ、翔太郎、照井は事務所を出た後、爆発が聞こえた所に来た。みんなはそれぞれのバイクを降り、変身ツールをだした

ヒオリ

「さて、今回は・・・魔導士の方で行こうかな・・・？」

翔太郎

「魔導士・・・？」

ヒオリ

「はい。簡単に言うと、魔法使いです」

士

「そんな力があるのか」

ヒオリ

「渡さんに助けてもらったときに、魔力が何故があったからデバイスをくれました」

ヒオリはそう言って自分の左腕に着いている腕時計を見た

ファイラー

（マスターは・・・やはり何も覚えていないのですね・・・）

士

「ま、とにかくやるぞ！変身！」

<カメンライド デイクライド!>

夏美

「キバーラ!」

キバーラ

「オツケ〜夏美ちゃん」

夏美

「変身!」

<アクセル!>

照井

「変・・・身!」

<アクセル!>

翔太郎

「行くぜ、フィリップ」

フィリップ

『OK、翔太郎』

<サイクロン!>

<ジャーカー!>

翔太郎・フィリップ

「変身!」

<サイクロン ジョーカー!>

ヒオリ

「ファイラー、準備はいい?」

ファイラー

【イエス、マスター】

ヒオリ

「そんじゃ、セットアップ!」

サイクロンジョーカー

WCJ

『あれはなんだい?』

WCJ

「ん?ああ、ヒオリの事か。あいつは、魔導士ってやつらしい」

WCJ

『魔導士?と言うことは、魔法が使えるのかい!?興味深い!早速  
検索を・・・』

WCJ

「検索なら後にしてくれ・・・」

デイケイド

「お前も大変だな、左」

WCJ

「ほっといてくれ・・・」

ヒオリ

「……おいドーパント、やるぞ。いいな？答えはきかねーけど！はああー！」

ヒオリは剣で<sup>スコーピオン</sup>Sドーパントに斬りかかった

Sドーパント

「ぐあー！」

ディケイド

「あ、居たんだ。お前」

Sドーパント

「酷いだろ！？このピ」ディケイドはマゼンダだ！「ぎゃああー！」

Rキバラー

「そのこだわりはどこから来たんですか……」

ヒオリ

「ま、あいつの相手してやるか……でやああー！」

Sドーパント

「ぐあー！……く……喰らえー！」

Sドーパントは毒針を飛ばす

ヒオリ

「こんなもの……フィーラー！」

フィーラー

【プロテクション】

Sドーパント

「何!？」

ヒオリ

「たあああ!」

Sドーパント

「だが・・・相手は1人じゃないんだぜ？」

D<sup>ドラム</sup>ドーパント

「はあ!」

ヒオリ

「な!?!ぐあ!」

フィーラー

【大丈夫ですか?マスター】

ヒオリ

「ああ・・・。まさか、俺の相手が2体とはな・・・。」

フィーラー

【無理しない程度に頑張らしましょう】

ヒオリ

「ああ・・・!」

WC」

「ふ、はっ！」

アイス  
Aドーパント

「く……！さすが、仮面ライダーだな。やりがいがある」

WC」

「そりゃどうも！」

Aドーパント

「喰らえ！」

Aドーパントは、冷気でWを凍らせようとする

WC」

『まずい……翔太郎！ヒートジョーカーでいこう！』

WC」

「ああ！」

そういつて、Wは赤いメモリを取り出す

<ヒート…>

<ヒート ジョーカー！>

WH」

「はあ！」

Aドーパント

「く!?!」

WHJ

「まだまだいくぜ!おらあ!」

Aドーパント

「ぐあ!・・・く、さすがにまずいですね・・・」

WHJ

「さあて、そろそろ終わらるか」

Aドーパント

「余裕ですね。・・・ですが、余裕とは、危ないですよ?」

WHJ

「なに・・・?」

そのとき・・・

ヒオリ

「ぐああ!」

WHJ

「うお!?!」

Dドーパントの攻撃で吹っ飛ばされたヒオリがWHJにあたった

WHJ

『大丈夫かい?翔太郎、ヒオリ』



W H J

「俺は大丈夫だ」

ヒオリ

「いてて・・・すみません、翔太郎さん」

W H J

「気にすんな」

A ドーパント

「戦闘中にお喋りとは・・・。殺されてもいいんですね？はぁ」

A ドーパントはW H Jに殴りかかる

W H J

『!まずい・・・!』

W H Jはとつさに右腕でガードする

A ドーパント

「ちっ・・・」

W H J

「すまねえ、フィリップ」

W H J

『気をつけてくれよ、翔太郎』

ヒオリ

「不意打ち、か・・・卑怯なことするな」

Aドーパント

「あなたが油断していたからでは？」

Aドーパントはクスクス笑いながら言う

Dドーパント

「お前の相手は俺らだろ！魔法使いよお！」

Dドーパントは殴りかかる

ヒオリ

「しまっ・・・！」

気づいた時には遅く、ヒオリは殴り飛ばされる

ヒオリ

「ぐあああ!？」

WHJ

「『ヒオリ!』」

Aドーパント

「隙だらけですよ!？」

WHJ

「くそ・・・!」

そのとき、WHJの横を狼のような動物が走って行く

?

「あの子は僕に任せて!」

WHJ

「あ、おい!」

WHJ

『翔太郎!今は目の前のドーパントに集中しよう!』

WHJ

「けど・・・!」

WHJ

『今はあの狼を信じよう!』

WHJ

「・・・そうだな」

Aドーパント

「仮面ライダー、本気をみせてくれるかしら?」

WHJ

「ふ・・・甘く見るなよ?いくぜ、フィリップ!」

WHJ

『ああ!』

WHJがAドーパントと戦っている頃、  
ディケイド、アクセル、R  
キバーラは……

ワーム

「ぐおおお!!」

ディケイド

「だああ!もう!さっきっからづるせえんだよ!」

ワーム

「ぐがあ!?!」

Rキバーラ

「それにしても……切りが無いですね!」

アクセル

「確かにな」

ディケイド

「何でこんなにいるんだよ!」

Rキバーラ

「知りませんよ!」

アクセル

「言い争ってる場合か!」

そっぴいなながらエンジンブレードでイマジンを切り裂く

ディケイド

「つたく・・・シヨツカーのやるつ・・・覚えとけよ・・・！」

Rキバーラ

「そんなこと言っても仕方ないでしょう！土君！」

アクセル

「いいから真面目にやれ！」

もうまともな人が照井しかいないこの3人

Rキバーラ

「て言うか土君、カブトになってクロツクアップすればいいじゃないですか！」

デイケイド

「それは奥の手だ！」

Rキバーラ

「ほかにないんですか!？」

デイケイド

「あるが必要ないだろ！倒してもでくるんだから！」

Rキバーラ

「でも少しは楽になるじゃないですか！」

アクセル

「・・・いいからちゃんとやれええええええ！」

その頃、殴り飛ばされたヒオリは・・・

ヒオリ

「いってえ……。俺なんかそんなに悪いことしてるかな……。？」

ファイラー

【敵にとってはやっかいな存在でしょう】

ヒオリ

「……。だよねえ。。。」

Sドーパント

「おらあああ！」

ヒオリ

「おっと！」

Dドーパント

「うおおおお！」

ヒオリ

「うわっ!？」

ファイラー

【(マスター、本気で二人相手するんですか?)】

ヒオリ

「(それしかないだろ)でやあ！」

Sドーパント

「ぐあ！」

Dドーパント

「後ろが隙だらけだぜ!？」

ヒオリ

「しまった!」

Dドーパントはヒオリに殴りかかる。・・・が、

?

「チェーンバインド!」

Dドーパント

「なんだ!？」

Sドーパント

「くそ・・・どこにいやがる!」

ヒオリ

「いったい誰が・・・」

ファイラー

【・・・マスター、前に神に頼んでいたあれでは・・・?】

ヒオリ

「使い魔のことが。・・・やっときたんだな」

?

「どこについて・・・君たちの上だよ?」

Dドーパント

「な・・・なにっ!?!」

Sドーパント

「狼・・・だと!?!」

?

「大丈夫? ヒオリ」

ヒオリ

「ああ、大丈夫だ。 レイン」

レイン

「ならよかった」

といいながらヒオリの隣に立つ狼      レイン

フィーラー

【マスター、さっさと終わらせましょう】

ヒオリ

「ん、そうするか。行くぞ、フィーラー、レイン!」

フィーラー

【イエス、マスター】

レイン

「了解、ヒオリ!」



ヒオリ

「レイン、Dドーパントを頼む！」

レイン

「オツケー！」

Dドーパント

「くそ・・・舐めやがって、いくぞ！」

Sドーパント

「おうよ！」

ヒオリ

「今更だが・・・手加減はしないからな！」

レイン

「邪魔だから消えてね」

ニッコリと笑いながら言うレインだが、逆にその笑顔が怖い

ヒオリ

「ファイラー、ガンモード」

ファイラー

【了解。モードチェンジ、ガンモード】

ヒオリ

「くらえ！サンダーシュート！」

ヒオリはSドーパントに向けて雷の弾丸を放った



第3話『Wの世界／ヒオリの使い魔!？』（後書き）

作

「え、いきなりですが、お知らせがあります」

士

「なんだ、改まって」

作

「俺は来週の金曜日に卒業式があるので、6時間目の授業が長引いて帰りが遅くなり、パソコンがあんまりできないかもしれません」

夏海

「でも、それだったら練習が長引かなかったら大丈夫じゃないですか？」

作

「そうでもないんだよ……。今家庭科のやつでバックとかナツプザックとか作り終わってない人が放課後に残ってやってるんだ」

ヒオリ

「お前はおわってんだから、残る必要ないだろ？」

作

「それがさ、ミシンの使い方がわからない人に教えたり、明日ミシンを使う人とか黒板に書かないといけないし……。何というか……管理？」

レイン

「へえ。いろいろと大変なんだね」

作

「そしてなるべくはやく終わらせて下駄箱に行かないと一緒に帰る男子数名が待ちくたびれてるんだ・・・」

フィリップ

「まあ、ドンマイだね」

翔太郎

「自分からやってるんなら、文句言つなよ」

作

「ふあゝい」

ヒオリ

「次回、第4話『Wの世界／新たなライダー？』」

夏海

「お楽しみに！」

士

「いつになるかわからんが、次回もよろしく！」

レイン

「最後に、台詞いきますよ。せいの！」

全

「全てを破壊し、全てを繋げ！」

第4話『Wの世界／新たなライダー？』（前書き）

作

「よっしやあああああ！何とか書きおわったあああ！」

ヒオリ

「遅い」

作

「うぐ」

士

「何か月放置してんだ」

作

「ぐ．．．」

ファイラー

【次からは早くするとかどっのどっのと言っていたじゃないですか】

作

「ぐう．．．」

フィリップ

「そして何より．．．

今回の内容が雑すぎるし、グダグダすぎ

る」 止めの1撃

作

「OO」チーン

翔太郎

「いや・・・作者逝くなああああ!?!」

照井

「絶望がお前のゴールだ」

亜樹子

「追い詰めないであげて竜君!?!」

夏海

「えっと・・・第4話、始まります!」

#### 第4話 『Wの世界／新たなライダー?』

Rキバーラ

「はぁ．．．はぁ．．．。」

デイケイド

「夏みかん、大丈夫か?」

Rキバーラ

「大丈夫、です。」

デイケイド

「無理すんなよ!．．．つと!つたく．．．本当にむかつくな!」

アクセル

「門矢士．．．だったか?お前は何か知らないか?」

デイケイド

「知っていたら苦労はしない!」

ライドブツカーで斬りつけながら、返事をするデイケイド。

アクセル

「それもそうだな．．．。」

Rキバーラ

「もう．．．いつまで続くんですか?これ．．．。」

キバーラ

『夏海ちゃん、本当に大丈夫?』

Rキバーラ

「大丈夫です……。土君やユウスケ、色んな世界のみんなも、こ  
うやって戦ってるんですから……。」

キバーラサーベルで敵を斬りつけながら、キバーラに返事をする。

キバーラ

『そうだけど……。夏海ちゃんが倒れたら元も子もないわよ。』

Rキバーラ

「はぁ……。はぁ……。そうですけど……。」

そう答えるRキバーラの背後に、剣で斬りかかるようにするオルフェ  
ノクの姿が……

キバーラ

『夏海ちゃん!後ろ!』

Rキバーラ

「え……。!?」

キバーラに言われて振り向くが……

オルフェノク

「ぐおがああああ!」

容赦なくRキバーラを斬る。



Rキバーラ

「きゃあああああ!?!」

吹き飛ばされ、変身が解けてしまった。

デイケイド

「夏海!・・・くそ!照井!一旦引くぞ!」

アクセル

「別にいいが・・・この敵はどうする!?!」

デイケイド

「クロックアップで片付ける!お前は夏海を頼む!」

アクセル

「わかった!」

そういつてすぐに気を失っている夏海に必死に声をかけるキバーラの元に駆け寄った。

デイケイド

「お前ら・・・覚悟はできてるよな?」

<カメンライド カブト!>

Dカブト

「俺を怒らせるとどうなるか思い知らせてやる・・・!」

<アタックライド クロックアップ!>

Dカブトの姿が消えたと思ったら、次々とワームが爆発していく。

アクセル

「・・・何が起こってるんだ・・・？」

そう呟くアクセル。

<クロツクオーバー>

Dカブトは、ディケイドの姿に戻る。

ディケイド

「一旦事務所に戻って、作戦を立てた方がいい。」

アクセル

「そうだな。」

ガキイイイン！

「D ドラゴン トーパント

「くそ・・・こいつ、強い・・・!？」

レイン

「これ以上邪魔するなら、容赦はしない」

そういつて剣を構えなおすレイン。さつきと違い、おちゃらけた雰囲気ではなく、目つきを鋭くし、相手を睨むようにみている。

Dドーパント

「うち……。ここは一旦ひくか……!?!」

レイン

「逃がさない!」

レインはロストドライバーのようなものを取出し、腰に巻く。そして、一本のガイアメモリを取り出す。

Dドーパント

「!?!そのベルトは……!」

レイン

「お前には、これで十分」

<クロー!>

レイン

「変身」

<クロー!>

レインの体は、黄色の風に包まれ、風が消えた時には……

クロー

「……」

ボディは黄色、背中には2本の剣、そして手にはトラの爪のようなクローが装備されている（オーズのトラクローを想像してください。by・作者）。

Dドーパント

「き、貴様もライダーだったのか……!?!?」

クロー

「いくよ……」

剣を一本背中からとり、切りかかるクロー。Dドーパントは、辛うじて避ける。

Dドーパント

「くそ……こんな聞いてねえぞ……!?!?」

クロー

「だろうね。知ってたのは……作ってくれた人と、その関係者だけだもの」

剣を背中に背負い直し、

クロー

「悪いけど、逃がす気はないよ」

そついい、ベルトからメモリを取り、そして……

ヒオリの放ったサンダーシユートは、スコピオンSドーパントにあたる。

Sドーパント

「っち……!まずいな……。あドっラちコもン押ドされてるからな……」

「

ヒオリ

「もう一発!」

Sドーパント

「そうはいくか!」

そう言っつて針を飛ばすSドーパント。

ヒオリ

「効かないっつて言っつてるだろ!」

フィーラー

【プロテクション】

Sドーパント

「うまく引っつかかってくれたな!」

そう言っつてDドーパントの方に向かうSドーパント。

ヒオリ

「なに・・・?・・・まさか!」

フィーラー

【逃げる気ですね。どうします?マスター】

ヒオリ

「追いかけるに決まっつてるだろ!」

追いかけようとするとヒオリの足下に、一本の剣が突き刺さる。

ヒオリ

「どわつと！・・・なんだこの剣・・・？」

ファイラー

【！マスター！あそこに・・・】

ヒオリ

「・・・ん？」

振り向くが、誰もどこにもいない。

ファイラー

【・・・？さっきそこにいたんですけど・・・】

ヒオリ

「・・・この剣は・・・」

とある屋上

そこには、一人のローブを着た男が立っていた。

「危ない危ない・・・。ファイラーは優秀だからな・・・」

男はふう・・・と、安心したように溜息をつく。するとそこに、灰色のオーロラが現れ、一人の青年が姿を現す。

「いきなりいなくなってびっくりしましたよ」

「あー、すまん。渡」

青年 渡は、「まったく……」と言いながら腕を組む。

渡

「行くのはいいですけど、誰かに声をかけていくか、メモを残すかして行ってくださいよ。話し合いから帰ってきたらいなかったんですから。誰でもびっくりしますよ」

「すみません……」

渡

「それで……なんでもあのドーパントを逃がしたんですか？」

「……何のことかな？」

渡

「恍けないでください。あれはどう見てもあのドーパントを逃がしたようにしか見えません」

「ドーパントを逃がしたわけじゃない……。だれだって焦ると冷静さを失う……。そうだろ？今のあいつは少し焦ってるように見えな。それに、あの怪我で深追いしたら危ない……。そう判断したから、剣を投げた」

渡

「そうですか……。ていうか……。いつの間にヒスったんですか、あなたは」

ヒスった、とは、ヒステリアモードになったということだ。緋弾のリアを見ている方はわかるかもしれないが、ヒステリアモードは、

正式にはヒステリア・サヴァン・シンドローム、という。・・・まあ、主人公の彼よりは酷くないが・・・詳しいことは後書きにて。

「この頃自力でなれるようになってきたんだ。なんとか、ね」

渡

「それはよかったですね。・・・ひとまず帰りますよ。いろいろ話がありますから」

「・・・絶対怒られるよな？それ」

渡

「さあ？」

知らない、というように、わざとらしく首を傾げる渡。

「・・・完璧に怒られるな」

今度ははぁ・・・と諦めたように溜息をついた。そして二人は、現れた灰色のオーロラに包まれ、その場には1枚のカードが落ちていた。そのカードの名は・・・



第4話『Wの世界／新たなライダー？』（後書き）

作

「あの時ああ、してなければ、あれをやれてたら」

士

「・・・ついに壊れたか」

ヒオリ

「自分のことを言ってるんじゃないですか？」

夏海

「それよりも、作者さん。ヒステリアモードについて説明してくださいよ」

作

「へーい」

ヒステリア・サヴァン・シンドローム

緋弾のリアの主人公、遠山キジの特殊体質。性的に興奮すると、一時的に人が変わったようになる。そして何でもかんでも女の子を守りたくなる。

作

「簡単に言つとこうだね」

士

「なぜ伏字」

作

「いや、一応やっとしたほうがいいかと……」

ヒオリ

「じゃあなぜしようと思った？」

作

「いや、なんか特殊体質つきたいなあ……って思ってたらちようどいいのみつけたから。……でも、遠山キジよりは酷くないから。大丈夫」

翔太郎

「そういう問題か……？」

作

「うん」

フィリップ

「ただ一言いいかい？」

作

「なに？」

フィリップ

「次からは早めにしてくれよ？頼むから」

作

「すみません。努力します」 土下座

夏海

「次回、第5話！」

ヒオリ

「『Wの世界／二丁拳銃を使いこなせ』・・・お楽しみに！って何このタイトル！？」

作

「ほら、ヒオリは銃ひとつしか使えないじゃん？だから特訓」

全員

「なんじゃそりゃ」

作

「うっせー」

第5話『Wの世界ノ二丁拳銃を使いこなせ』（前書き）

作「よっしゃ終わったー！」

士「驚いた……」

作「何が？」

士「更新が早いのに……」

作「（〇〇）」

ヒオリ「放心状態になるなよー」

翔太郎「……作者はほつとけばなおるだろ」

フィリップ「そうだね。それじゃあ……第5話『Wの世界ノ二丁拳銃を使いこなせ』」

翔太郎「始まるぜ！」

第5話 『Wの世界／二丁拳銃を使いこなせ』

ヒオリは、飛んできた剣をどこかで見たことがある気がして、必死に思い出そうとするが、なかなか思い出せない。すると・・・

士

「ヒオリ！大丈夫か!？」

ヒオリ

「っ、士さん!？」

ヒオリのもとに士が駆け寄ってきた。さらに・・・

レイン

「・・・ごめんヒオリ、逃がした・・・」

翔太郎

「俺もだ。・・・くそっ、あいついきなり人間に戻りやがって・・・」

士

「人間に戻った・・・?」

翔太郎

「ああ。戦っている最中にな。危うく殺すところだった。・・・まあその話は、探偵事務所に戻ってからだ」

そういってさっさとハードボイルダーに向かう翔太郎。

士

「そうだな。・・・夏海の手当ても頼まないといけないしな」

そのあとを追うように、士もマシンディケイダーに向かう。

ヒオリ

「え？夏海さん、怪我したんですか!？」

士

「ああ。・・・俺のミスでもあるがな」

士はバイクにまたがり、早く乗れ、という。・・・今は話したくないのだから。その気持ちを理解したヒオリは、返事をしてバイクに跨る。

ヒオリ

「・・・あ、レイン。犬になれる？もしくは猫」

レイン

「もちろん!」

レインは光に包まれ、赤っぽい毛並みの犬の姿になった。

ヒオリ

「肩に乗って。しっかりつかまってね」

士

「じゃあ行くぞ」

翔太郎

「照井は？」

士

「先に戻ってる。・・・夏海を頼んどいたからな」

翔太郎

「そうか・・・ お前にとって、夏海は大切なんだな」

士

「なんだ？最後のほうで聞こえなかったぞ」

翔太郎は、なんでも無い、というスピードを上げた。それに合わせるように、士もスピードを上げた。

???

ここには、さっきの青年と、渡がいた。二人は、ある場所に向かいながら、話をしていた。

渡

「・・・あなたは、まだ恨んでるんですか？仲間を・・・」

「・・・元仲間、な。・・・まあ、俺の近くにいたら、死ぬかもしれなかったし、そもそも、俺自体が怪物みたいなものだったしな」

渡

「自分で言いますか？それ」

「認めてることだ。・・・別になんとも思わない」

渡

「そうですね・・・」

・ そういうと、会話が途切れてしまった。そのまま長い沈黙が続き・

渡

「でも・・・」

長い沈黙を破ったのは、渡だった。

「なんだ？」

渡

「本当にいいんですか？そのままです・・・元・・・前の仲間に、あわなくて」

「・・・渡には関係ないだろ」

渡

「関係ありますよ・・・レオキ」

レオキと呼ばれた青年は、悲しげな顔をし、

レオキ

「・・・あいつらとは、あわないつて決めたんだ」

渡

「ですが・・・後悔するのは」



レオキ

「後悔なんてしない！」

歩くのをやめ、怒鳴るレオキ。渡は驚いたように、目を見開いている。

レオキ

「あいつらは、俺の正体を知っても、裏切らないって言った！・・・なのに、俺の姿をみて、すごく怯えてた・・・当たり前前の反応だったかもしれない。でも、俺はその前に言った。シヨツカー達みたいな怪物だぞって。それでも仲間だっていつてくれた。・・・なのに、なのに・・・！」

渡

「・・・」

渡は、ただ黙って、レオキの言葉を　心の叫びを聞いていた。

### 探偵事務所

翔太郎

「亜樹子ー、照井ー？」

亜樹子

「あ、翔太郎君！」

士

「……夏海は？」

照井

「今は奥の部屋にいる。……所長が手当てしといてくれた」

士

「そうか……。ありがとな」

亜樹子に礼を言つと、士はさっさと奥の部屋に行った。

ヒオリ

「あ、士さん！」

あとを追おうとするが、翔太郎とフィリップに止められる。

翔太郎

「今はそつとしておいたほうがいい。……士は、夏海を怪我させてしまったのは自分のせいだと思ってるかもしれない」

フィリップ

「翔太郎の言うとおりだ。それに、彼は感情をあんまり表に出さな  
いんじゃないか？……前の照井竜みたいにね」

フィリップは照井のほうをみる。

照井

「……否定はしない」

照井は少し俯きながら答える。

フィリップ

「・・・あ、そうだ」

フィリップは何かを思い出したように、ヒオリをみる。

ヒオリ

「なんですか？」

翔太郎

「・・・まさか」

フィリップ

「魔法について聞かせてくれないか!？」

翔太郎は呆れたように溜息をつき、照井は無視してコーヒーを淹れ、  
亜樹子は・・・

亜樹子

「え!？ヒオリ君魔法使えるの!？」

・・・フィリップ同様、興味深々だった。

ヒオリ

「え・・・えええ!？」

二人に頼まれ、どうしていいかわからないヒオリ。翔太郎に視線を  
送るが、

翔太郎

「すまねえヒオリ。・・・俺じゃあその二人を止められない。フィ

リップは気になるものを自分が納得するまで調べるからな……」  
諦めたように、遠い目をしながら答えた。

照井

「先に言っておくが、俺にも無理だ」

さらにコーヒーを飲みながら照井も断る。

ヒオリ

「えええええ……どうしよう?」

レイン

「ねえヒオリ」

今まで肩にのっていたが一言も喋らなかつたレインが突然声を出した。

ヒオリ

「うわ!……びっくりした。どうしたの?レイン」

レイン

「あのさ……って、なんかすごく見られてるんだけど……」

フィリップと亜樹子は、レインに視線がいつている……まあ、  
事情を知らない人が見れば、犬が喋っているように見えるわけで……

亜樹子

「い、いい犬が喋ってる!？」

フィリップ

「興味深い！さっそく検索を・・・」

こういう反応になる。・・・フィリップなんかはもう検索し始める。翔太郎と照井は、顔を見合わせて溜息をついた。

レイン

「・・・あ、さっきの話の続きだけだよ、」

ヒオリ

「うん」

レイン

「二丁拳銃使いこなせるようにしといてね」

ヒオリ

「・・・は？」

いきなり訳のわからないことを言われ、呆然とするヒオリ。・・・翔太郎も呆然としている。照井は・・・まったく気にしてる様子はない。なかつた。

ヒオリ

「いきなり何言ってるの？二丁拳銃を使いこなせるようにしといて？」

レイン

「そう。・・・渡さんも言ってたよ？訓練してた時に、二丁拳銃を使いこなせるようにしといたほうが、これからの戦闘に役に立つ」

て

ヒオリ

「渡さんも言ってたんだ・・・」

ヒオリはどうしようか迷ったが、考えてみれば役に立つので、

ヒオリ

「じゃあ、練習しようかな」

二丁拳銃を使いこなすために、練習をすることにした。

レイン

「じゃあ・・・どっかちょうどいい場所ありますか？」

翔太郎

「あるけど・・・山だから少し遠いぞ？」

レイン

「大丈夫です、飛ぶんで！・・・ヒオリが」

ヒオリ

「俺かい！？お前も飛べよ！？」

レイン

「じゃあ、どうかして案内お願いします」

お辞儀をするレイン。・・・翔太郎は、

翔太郎

「 どうにかって、俺は飛べねえぞ!？」

とか叫んでいたが、フィリップが、「ハードタービュラーでいけばいいじゃないか」と言ったため、とりあえず解決した。・・・無理やりだが。

第5話『Wの世界／二丁拳銃を使いこなせ』（後書き）

作「（〇〇）」

士「……………」 部屋の隅で体育座り

翔太郎「…………えー、放心状態の作者と落ち込んでる士に代わって、俺たちがいろいろとお知らせを」

フィリップ「今ちょっとした問題になってる、【歌詞の無断転載に関するお知らせ】についてなんだけど、活動報告でも言ったけれど、作者は一通りみたけど、もし読み返して、歌詞などが書いてあったら感想やメッセージ、コメントで教えてほしいんだ」

ヒオリ「よろしくお願いします。……あと、作者は今日から夏休みで、宿題を早く終わらせて、小説を早く更新できるように頑張る、と言っていました」

上三人「次回もお楽しみに！」



第6話『Wの世界／ヒオリの特訓』（前書き）

作「ふっふっふ…俺は燃え尽きた…」

士「じゃーねー」

作「ひで!？」

翔太郎「いいから始める!」

亜樹子「第6話、始まるよー!」

第6話 『Wの世界／ヒオリの特訓』

風都 とある山

W H M

「ここなら大丈夫じゃないか？」

ヒオリ

「ありがとうございますーす」

W H M

「それじゃあ、気を付けてな」

そう言っ翔太郎て帰ろうとするW H Mしかし…

W H M

『さ、さっそく始めてくれ』

それを相棒が許さなかった（笑）

W H M

「…俺は帰りたいんだが…」

W H M

『なぜだい！？君は気にならないのかい！？魔法というものを！』

W H M

「気にならねえよ！？」

何やら言い合いを始めたので、（しかし体は一つのため周りから見ると一人でケンカしてるように見える）ヒオリは特訓を始めた。

ヒオリ

「よし…。いくよ、レイン！」

レイン

「じゃあ飛び回るからデバイスのガンモードを二本使って僕に当ててみて」

そう言っただけ空に向かって高く飛ぶレイン。

ヒオリ

「って高！？」

レイン

「これくらいの高さを当てられないとー。…五分以内にクリアを目標に！それじゃスタート！」

ヒオリ

「しかも時間制限あり！？」

などと文句を言っているが、その間にもレインは空を飛びまわる。  
…そして時間も過ぎていく。

ヒオリ

「…やるしかないか…。…あー、なんか慣れないなあ…」

レイン

「時間が無くなるぞー！」

ヒオリ

「やば……。…集中集中」

ヒオリは空を飛びまわるレインにデバイスを向ける。そして集中しようとするが……

W H M

「いや、俺は帰りたいんだ！」

W H M

『いいじゃないか！見ていても！』

W H M

「お前なあ……。！」

Wの二人が言い合いをまだ続けていて、集中できなかった。

ヒオリ

「…二人とも、うるさいです」

W H M

「…すみません」

ヒオリ

「あとフィリップさん、見たいんなら直接来てください」

W H M

『…じゃあ翔太郎、一旦戻ってきてくれ。そのあとファンゲジョーカーで行く』

W H M

「いや、むしろエクストリームのほうが…」

W H M

『…そうだね。よろしく、翔太郎』

W H M

「おう」

ヒオリ

(それでいいのか…?ま、いつか)

レイン

「二分経過ー」

ヒオリ

「マジか…」

改めてデバイスを空に向ける。

ヒオリ

「……………はっ!」

まず右で一発。

レイン

「おっとー。…もっとしっかり狙わないとー!」

ヒオリ

(落ち着いて、よく狙って…)

レイン

「ほれー、早くしないと時間切れになるぞー」

ヒオリ

「…言われなくても分かってる。…はあ！」

今度は二発撃つ。…しかし、二発とも避けられてしまう。

ヒオリ

(くそ…当たらない。…乱れ撃ちしてみるか)

ヒオリは二本のデバイスを空に向ける。そして、撃つ。

レイン

「乱れ撃ちかー…。うわっとー！」

レインは次々と飛んでくる魔力弾を華麗に避けていく。

ヒオリ

(当たらない…!)

レイン

「残り一分!さあ頑張れ!」

ヒオリ

「もう一分か…だったら、一か八かで…!」

ヒオリはさらに撃つ。

レイン

「よくそんなに続けて撃てるね！？…ってっわぁ！？」

慌てて避けたため、バランスを崩す。そう、ヒオリは隙を作るために、撃つ数を多くしたのだ。

ヒオリ

「そこ…だぁ！」

最後に思いっきりでかいのを撃つ。

レイン

「って…でかいわぁぁぁぁぁ！？」

どかーん…

見事にレインに直撃した。エクストリームで来たフィリップは…

フィリップ

「…すごい。子供とは思えない」

翔太郎

「あぁ…」

ヒオリ

「って、レイン！？大丈夫！？自分でやっといてあれだけ！」

レイン

「大丈夫…。ギリで防げた…」

よろよろ〜と降りてくるレイン。…そうとつギリギリだったようだ。

ヒオリ

「ごめん、レイン。思いっきり撃って…」

レイン

「大丈夫…特訓だから…」

本当に大丈夫か？と思うような元気のなさ。

フィリップ

「しかし…ヒオリ君、君はすごいね！」

翔太郎

「ああ。…ありえないほど強いな。もしかしたら俺よりも強いんじゃないか…？」

翔太郎は首を傾げながらヒオリに尋ねる。

ヒオリ

「それはないです、さすがに」

…だがヒオリは即答で答えた。

レイン

「じゃあ次は…」

ヒオリ



「え？…まだあるの？」

レイン

「当たり前。次は、左だけで僕がプロテクション展開するから、それに当ててみて」

ヒオリ

「オッケー。…あ、フィリップさん、こっ<sup>右</sup>ちのデバイス、持っててください」

ヒオリはフィリップに投げ渡す。フィリップは慌ててキャッチをする。

フィリップ

「これがデバイスか…興味深いね…」

翔太郎

「壊すなよー」

フィリップ

「当たり前だよ」

ヒオリ

「じゃあ行くよ、レイン」

レイン

「どんどん撃っていいからねー」

この後も特訓が続き、三時間くらいやっていったとか。

第6話『Wの世界／ヒオリの特訓』（後書き）

作「ところでさ、」

翔太郎「うん」

作「ただの後書きって、なんかつまらない？」

フィリップ「…そうかな…？」

作「うんそうだよ」

士「で？何をしたいんだ、お前は」

作「決めてない」

レイン「……なのに言ったの？」

作「うん」

照井「なんで」

作「いや、だから読んでくれている方に、リクエストを聞こうかなって」

亜樹子「つまり、意見を求めるの？」

作「そのとおり」

照井「と言うことで、」

翔太郎「緊急リクエスト！」

フィリップ「後書きでやってほしいことを募集するよ」

亜樹子「どんどん頂戴ねー！」

士「次回、仮面ライダーディケイドへ新たなる旅は！」

ヒオリ「土さんと夏海さんの甘ったるい話です！」

士「こちら！？」

ヒオリ「第7話『TとN／謎のカード』、お楽しみに！」

## 第7話『TとNノ謎のカード』（前書き）

作「ごめんなさい…本当にごめんなさい…！」

士「さて、土下座している作者は置いておき！」

翔太郎「いや置いとくな！」

ヒオリ「お待たせしました！やっと弾7話です！」

夏海「それでは第7話、『TとNノ謎のカード』、  
フィリップ「始まるよ！」

## 第7話『TとN/謎のカード』

やっと特訓が終わり、ヒオリはへとへとだった。

ヒオリ

「レイン…これはきついと思う」

レイン

「ごめん、やりすぎた」

ヒオリ

「火あぶりにしてやるうか、この野郎」

レイン

「嘘です冗談ですだからデバイス構えないで!？」

目が本気のヒオリ。…というか、さすがに火あぶりは…

フィリップ

「しかし…あんなにやって大丈夫なのかい?」

翔太郎

「さっきからずっと転がってるじゃねーか」

そう。ヒオリは特訓が終わり、三十分立っても起き上がろうとしないのだ。…何故かというと、

ヒオリ

「いや、もうね、飛んだり撃ったり、素早く避けたり、素早く飛ん

で回避したり、ずっとデバイス二本で撃ち続けたり、撃ちながら避  
けたり……。とにかく、何かもう立つ気力が…」

レイン

「すみませんでした」

ヒオリからは驚く程の内容が出てくる。それに対してレインはただ  
謝るしかない。…そう、許してもらえるまで…。

翔太郎

「いつまでもここにいるわけにもいかなからなあ……。……仕方な  
い、ハードタービュラーにのっけていけ」

翔太郎は、少し考えた後、ヒオリに提案する。

ヒオリ

「え？…でも、悪くないですか？」

ヒオリは聞くが…

翔太郎

「その体で飛んだら途中で落ちるだろ」

ヒオリ

「……………」

…凶星だった。

ヒオリ

「…じゃあ、お言葉に甘えます」

図星だったため、乗せてもらうことにした。…レインは犬モードになってヒオリの肩にのり、フィリップの体はW H Mが回収して乗っけたため大丈夫。

探偵事務所…

ヒオリが特訓に行っている頃、士は夏海が寝ているベッドの近くの椅子に座っていた。

士

「……はあ」

溜息をつきながら天井を見る。

士

「……クロックアップ、もう少し早く使ってればこんなことには…」  
どうやら翔太郎とフィリップの言つとおり、士は自分のせいだと思っ  
っているようだ。

士

「…あー畜生…。俺の判断ミスか…」

士は椅子から立ち、ベッドの近くにしゃがむ。ベッドでは夏海が寝息を立て寝ている。そんな夏海の頭を撫でながら、士は寝ている夏海に謝罪する。

士

「…ごめんな、夏海…。俺のせいで……」

すると、寝ているはずの夏海が…

夏海

「ん〜…土君は…悪くないです…」

士

「な、夏海!?!」

起きたのかと思って慌てて手を放す士。

夏海

「むにゃ…」

…ただの寝言だった。

士

「なんだ…寝言か…」

士はほつと胸を撫で下ろす。そして、部屋を出る。

照井

「…大丈夫か、門矢」

出ていきなり照井に心配されるが、士は「大丈夫だ」と答えると、翔太郎とヒオリがないことに気付く。

士

「おい。ヒオリと翔太郎は?」

亜樹子

「翔太郎君とヒオリ君なら、山に特訓しに行ったよ?」

士

「そうか…。…俺も少し出かけてくる」

亜樹子

「ちょ…夏海ちゃんは?」

士

「お前らに任せる。…じゃ」

亜樹子

「ま、任せるって何?ちょっと待ってー!??」

手を軽く振って探偵事務所を出ていく士。出て言った直後、「私、聞いてないー!」という声が聞こえたが、士は聞こえなかったことにした。

探偵事務所を出た士は、ドーパントやワームと戦った場所に来ていた。

士

(…やっぱり、何もヒントはないか…)

そう思いつつ、士はあるビルに上る。…なんで登れるのかった?…そんな常識さえも破壊してしまうのさ。…という冗談はさておき、本当はこのビルはもう使われていないため、誰でも上ることができってしまうのだ。



士

(…こんなところにヒントがあるわけないか…)

士は階段を上り、屋上につく。

士

「結構高いな…」

なんとなく屋上の端に向かう。そして、足元に何か落ちていることに気付く。なんでこんなところに？と思いながら、拾う。

士

「…カメンライドカード…？」

いつの間にか落としたのか？と思う士だが、すぐに自分はこのに来たのは初めてと言うことを思い出す。じゃあ海東のか？と今度は思うが、海東が落とすわけがない、と結論をだし、誰のか悩む。そして名前を見ると、そこには…

士

「『ダイヤソード』…？」

と書かれていた

????

とある部屋…

会議室のようなところに、八人人が集まっていた。

「あのな、お前あれほど言ったよな？勝手にいなくなるなって…」

「本当だよ。びっくりしたんだよ？」

「…すみません」

と、会話する三人は、上から順に『剣崎一真』、『津上翔一』、そして…レオキだ。…ちなみに、こっそり出かけたのはあれが初めてではないようだ。

「まあいいだろ剣崎。無事だったんだから」

若干怒っている剣崎に対して一人の青年が呆れながら言う。

剣崎

「いや、そうなんだがな、乾」

青年 『乾巧』はまた呆れながら言う。

乾

「あーもう別にいいだろ」

そう言っつて頬杖をする乾。

渡

「さて…さっさと特訓始めますか。…レオキのせいで時間が遅れましたが」

レオキ

「二重の意味ですいませんでした」

渡

「じゃあまずは…天道さん対津上さん、次に城戸さんと僕、次は剣崎さんと良太郎、最後は乾さんとレオキね」

天道

「ああ。わかった」

津上

「おっけ〜」

城戸

「じゃあ！頑張るぞー！」

剣崎

「城戸うるさい」

良太郎

「みんな、頑張ろっね」

タロウズ

『『おっー！』』

乾

「ま、適当に…って、どうしたレオキ」

乾は、自分の横でポケットの中を探っているレオキに問う。

レオキ

「いや、ちょっと…」

なにかやばそうな顔をしているレオキ。

剣崎

「まさかとは思つが…」

レオキ

「…カメンライドカードどっかにいきましたっ！」

レオキのカミングアウトに、みんな驚く。…ただ一人を除いて。

剣崎

「…………お前、ぶん殴ってやるつか…!？」

レオキ

「ごめんなああい!？」

…………まあこのあとレオキは剣崎にぶん殴られたとか。

第7話『TとN/謎のカード』（後書き）

ヒオリ「くそ甘いッス」

翔太郎「そうっすねー」

士「わ、悪かったな！／／」

フィリップ（明らかに恥ずかしそうだね…）

作「さて、テストも終わり、三連休は部活がなし！イヤッフィー！

小説かけ（ry）」

士「いや、社会の宿題とかあるだろ」

作「orz」

士「あ…」

翔太郎「士のバカあああああ！？」

ヒオリ「今の作者傷つけたら後々大変ですよ！？」

士「すまん」

夏海「次回はいろいろと物語に変化がある…かも？です」

フィリップ「次回を楽しみにしていきなれ」

夏フィリップ「次回もお楽しみに！」

士翔「お前らがしめるんかい！？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6718m/>

---

仮面ライダーディケイド～新たなる旅

2011年10月10日12時08分発行